

平成 18 年度「新しい歴史教科書をつくる会」東京支部長のご挨拶

去る 5 月 30 日、「つくる会」本部は、昨年来の危機存亡の難局を乗り越え、小林会長を解任、藤岡新会長が就任して新しい陣容のもと、初心に返って「つくる会」の設立趣旨に則り「新しい歴史教科書」を発行し続け、子供達の手元に届ける事に邁進する事を改めて誓いました。

東京支部もこれを受け、本部と密に連携し、教科書採択運動を強力に推し進める事を会員の皆さんと心一つにして確認する為、9 月 9 日の本部総会に先立ち“急遽”ここに総会を召集させて頂きました。

「つくる会」は約 2 年近くに及ぶ試練の時期を経てここに再スタートを切ると言っても良いでしょう。この度の混乱から再生を目指して、原点に立ち返り、足元を見つめ直して我々の今後の活動指針を確認したいと思います。

その設立趣意書には『私たちは、21 世紀に生きる日本の子どもたちのために、新しい歴史教科書をつくり、歴史教育を根本的に立て直すことを決意しました。……子どもたちが、日本人としての自信と責任を持ち、世界の平和と繁栄に献身できるようになる教科書です。私たちはこのような教科書をつくり、普及するために必要な一切の活動を力強く推進します。……』とあります。

私たちはここで更にもう一步、何故そのような運動が必要になったかをこの機会に改めて考えてみる必要があるかと思えます。

戦後の占領軍による侵略、特に徹底した精神的な侵略を受けて東京裁判史観に洗脳された日本人は、その後、左翼思想が世界的に広まる潮流に乗り、自ら東京裁判史観に複合した左翼自虐史観を全面的に受け入れて来た“複合汚染”の 60 年があります。

その過程に於いて今日までの 10 年、我々「つくる会」をはじめ多くの保守層の覚醒による目に見える活動でようやく左翼の勢いを押し留めつつあるというのが今日の状況ではないでしょうか。

しかしその内情を覗けば、保守派リーダーでさえもその靖国神社への見識の無さを見るように、目も当てられない惨状が未だにあります。全ては左翼偏向の大マスメディアに洗脳され、自虐史観の殻に閉じ込められて横のつながりを遮断され、孤立して自らの考えに確信を持たずに、さ迷い状態にある情けない多くの日本人の姿が其処にあります。

一方この 10 年の中国の台頭は大状況として日本のあらゆる面に穩然たる影響を及ぼし始め、「つくる会」も又例外ではなかった事を我々は此処に確認する必要があるかと思えます。此処 2 年近くに及ぶ「つくる会」の混乱も正にその影響下にあつての現象であり、決して内紛など一言で片付けられる代物ではない事を認識する必要があります。

会員の数も最盛期に比べて三分の二近くに減少したようですが、今ここに残れる、集える皆様方こそ「つくる会」の設立精神を体現し、その中核として、「新しい歴史教科書」の普及を通してメルトダウンしかねない日本の背骨を担ってゆく方々であります。我々は「新しい歴史教科書」が保守の大海原のど真ん中で泰然と屹立する灯台であつて欲しい。その発する光に接し私達の今居る位置が鮮やかに確認できるような存在であつて欲しいと切に願うものであります。

しかしながら先日の「つくる会」主催の＜南京シンポジウム＞でパネルディスカッションの最後に、司会の藤岡先生に請われた東中野先生が各社の教科書にある南京問題に関する記述を採点したところ、

採択率最高の〔東京書籍〕「日本軍は、同年末に首都南京を占領しました。その過程で、女性や子どもをふくむ中国人を大量に殺害しました（南京事件）「この事件は、南京大虐殺として国際的に非難されましたが、国民には知らされませんでした」
東中野採点、0点

自虐率最高の日本書籍新社「年末には日本軍は首都南京を占領したが、そのさい、20万人ともいわれる捕虜や民間人を殺害し、暴行や略奪もあとをたたなかったため、きびしい国際的非難をあびた（南京事件）「殺害された中国人の数については、さまざまな説がある」
東中野採点、0点

採択率最低の〔扶桑社〕「このとき、日本軍によって、中国の軍民に多数の死傷者が出た（南京事件）なお、この事件の犠牲者数などの実態については資料の上で疑問も出され、さまざまな見解があり、今日でも論争が続いている」
東中野採点、0点

勿論、「新しい歴史教科書」は検定官の介入により上記のような情けない記述となったのでありますが、他の二社の記述に比べまだましだと満足している向きが多く見られます。果たしてそれで良いのでしょうか。これは我々のつくる教科書が今の時代にあって政治情勢如何に関わらず、事実のみにその基盤を置いて泰然と屹立した存在である事が如何に難しい事なのかを教えてください。

一部に教科書の内容を峻別するよりも多少の事には目を瞑り、＜大同団結＞、＜オールジャパン＞を錦の御旗にして会の設立趣旨を多少ないがしろにしても、数があれば何とかなると言った類の後世に禍根を残すような動きがあることを我々は厳しく見分けて峻拒すべきでありましょう。

「新しい歴史教科書」の採択率が0.4%と揶揄する多くの外野も居りますが、この10年の結果は決して落胆することなく、むしろ我々は大いにその成果を誇りとすべきものがあるのではないのでしょうか。

一昨年の教科書採択の結果は、「新しい歴史教科書」が杉並区で大輪の華を咲かすことが出来、更には各社の教科書から「慰安婦」の記述を消えさせ、「南京大虐殺」などの記述も慎重な表現に変化させました。又、日本神話を取り上げる教科書も増えています。この様に自虐史観や贖罪史観が改善され、正しい歴史認識が高まると共に、日本の外交も国益に沿った好ましいものになりつつあります。

我が国にこの様な変化をもたらしたのは、「新しい歴史教科書」の出版、「つくる会」の運動に負うところが大きいことは皆様ご承知の通りですが、一部にその内容が右寄り過ぎて受け入れられなかった、と言った世迷言も聞こえてきます。

歴史認識で一度妥協すれば妥協した相手には常に精神的に下位の立場を余儀なくされ、その国民の精神は崩壊し、国力は衰退のトレンドを辿る事は世界の歴史を改めて紐解くまでも無く、今日の日本がその良い例です。

私たちは「つくる会」の教科書を一人でも多くの子供達に手渡す運動を力強く継続し、自虐史観に凝り固まった勢力を打破したいと願うものです。たとえ社会の少数派となっても大海原のど真ん中に泰然と屹立する灯台、「新しい歴史教科書」の理念を更に堅固に打ち立て、世の中に普及させる使命を担う事を誇りとし、不借身命の想いを共有し進んで参りましょう。